慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	「第二之書パンタグリュエル」第十六章試訳, あるいは作品の「へそ」について
Sub Title	A propos du nombril d'une œuvre ; le chapitre 16 du Pantagruel
Author	荻野, 安奈(Ogino, Anna)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1999
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.77, (1999. 12) ,p.377(108)- 389(96)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	井口樹生, 高山鉄男両教授退任記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00770001-0389

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

「第二之書パンタグリュエル」第十六章 試訳，あるいは作品の「へそ」について

荻野　安奈

マクロコスモスとミクロコスモスの照応関係を発想の基に置く十六世紀へ，まずは読者を誘いたい。大宇宙に対する小宇宙とは通常人体を指すが，現実を前にすれば作品もまたひとつの小宇宙たり得る。人体にヘソがあるごとく，作品にも隠れた中心が存在する，と考えてみるのも一興である。近代通俗小説の，いわゆる山場は，予め望まれた中心として人工出ベソの観がある。小説作法に則った構成が出現する以前にも作品は存在し，作品である限りにおいて部分と全体の間に有機的な関係を成立させていた。

中世的散文物語から近代へ，語りの技術体系が移行しつつあった十六世紀は，自由が拘束として機能するがゆえに，自由に耐えうる才能が開花した時代でもあった。無からの創造は神のみに許されるとして，限りなく無に近い地点からの出発と，文法を持たないことを文法とする作品の創造は不可能ではなかった。その手のテクストには生命のぬめりがあり，あらゆる解読格子は上滑りして，あらぬほうへと落ちていく。その意味で難解なケースのひとつがフランソワ・ラブレーと，これは衆目の認めるところであろう。

言葉の手品師ラブレーは，無から鳩を出すと見せて，少なくとも手品のネタに相当する素材を，隠しポケットに忍ばせていた。初期二作（「第一之書」，「第二之書」）は騎士道物語のパロディという枠組みが設定されていたために，枠の無残な破壊そのものが作品たり得た。自信をつけた作者の指遣いはますます冴え，後期の「第三之書」になると，悩める主人公のボヤキと哲学漫才で全編が埋まり，読者は最後のページまで自然に導かれ

た末に，筋と内容を問われれば，自分が何を読まされたのか，首を傾げることになる。

処女作には作家のあらゆる可能性が詰まっている，と言われる。加えて手品の手順をある程度晒している，という点でも注目に値する。以下は「第二之書パンタグリュエル物語」を取り上げ，第十六章を新たに訳す試みである。どちらが頭か尾かわからないヌエのような作品にもヘソがあり，ヘソを拡大鏡で覗けば意外や全体が見えてくる，という具合に話が進めば，この戯文からも鳩が出たことになるだろう。

1532年秋，巨人パンタグリュエルはリヨン市立病院の医師ラブレーの手を煩わせて産声を上げる。父の名はガルガンチュア，母バドベック。息子のほうが父よりも先に生まれた，という点が通常の親子とは大いに異なる。約二年後に父が続編「第一之書」の主人公となることで，処女作でありながら「パンタグリュエル」は「第二之書」を冠するのである。

父に先行する息子の物語には，文字通りの先行作品があった。作者不詳の「ガルガンチュア大年代記」は，単純な骨格に粗野な笑いの皮をかぶせた民衆本であるが，その商業的な成功が，自作執筆の直接的なきっかけであるかのごとくパンタグリュエルの作者はふるまい，「プロローグ」では「この本が二ヵ月間で出版社から売れた部数は，バイブルの九年間の販売部数を上回っている」[(1)]旨強調した上で，ベストセラーを上回る出来と，自作の宣伝に余念がない。

たしかに「パンタグリュエル」は，「本人が言うのだから本当だ」というパラドックスを逆手に取り，質量の量だけでも四倍と，先行作品を凌駕している。巨人物語という枠組みが作品に与える制限を考慮すれば，量すなわち質。「大年代記」の骨と皮の間に，脂肪なり筋肉なりがたっぷり付いたことになる。小説という概念も，モノそのものも存在しない当時にあって，新たに加えられた肉付きが近代小説における描写と同質のはずもない。主人公の家系，誕生，成長，教育，武勲，と騎士道物語でお馴染みの展開に全三十四章が費やされているが，第五章で大学生にまで成長したパンタグリュエルが，本来なら中心的エピソードであるはずの戦闘場面によ

うやく身を置くのが第二十五章で，あっという間に勝負がついて，第三十章以降は余談となる。

第一章において，主人公の家系が初代から始めて六十一代にわたるまで羅列されるのは，小説に慣れた目には奇異でも，当時の物語の文脈には辛うじて納まる。次ぐ第二章で，パンタ（万物）がグリュエル（渇）する，という主人公の命名のみに一章が割かれ，「三十六カ月と三週間と四日と十三時間プラスアルファ」の凄まじい干ばつに，水を奪われた魚が「地面をさまよい叫び立てる」のも，最終的に叙述に回帰し得るコミカルな逸脱といえよう。逸脱に次ぐ逸脱を，かろうじてナレーションの糸で繋ぎとめる努力が見られるのは五章までで，無事成人の主人公を見届けたとたん，糸はぷつりと切れる。以後の二十章を支えるのは，物語らずに書くための意志であり，方法論である。無為と遅延の美学と言い換えてもいい。果敢な試みの大盤振る舞いは，可能性の宝庫としての処女作にふさわしいが，早書きの印象を，後世に残す所以ともなった。

初版に二つの第九章が含まれることも，意図よりは手抜かりの感を与える。版を重ねるうち，第九章 bis は第十章から第十三章まで四章に細分化されて落ち着くのだが，後述するように，最終的に第九章として残ったほうが，恐らくは推敲の過程で挿入されたと，本論では考えてみたい(2)。問題の第九章で突如として物語に乱入するパニュルジュが，以後二十章を過ぎるまで実質的な主人公を演じるのだが，物語のこの時点で，唐突なのは彼の登場に限らない。

第五章でフランスの大学巡りを体験し，オルレアンにたどり着いたパンタグリュエルが，当地でリモージュ出身の学生と出会った経緯が第六章である。「君，こんな時間にどこから来たの」といった巨人の簡潔な質問に，学生がラテン語崩れの「専門用語をゲロして」変態フランス語見本市の様相を呈し，独立したエピソードを形成する。第七章でパリに来た主人公は，到着早々舞台から身を引き，章の大部分は彼が通った図書館の，書籍の題名の羅列に充てられている。神学や法学の専門書がグロテスクに歪められ，「神の救いはマラ不思議」，「六法こんもりブリーフ全集」と一三九

冊が並べば，旧弊な学問への諷刺的意図は明らかとはいえ，直接物語へ吸収しきれない単品の印象が強い。続く第八章では，第七章のアンチテーゼとしてルネサンス的知のプログラムが開陳されるが，父ガルガンチュアの手紙という体裁が，またしても叙述と乖離した枠の機能を果たしている。

次はいよいよ第九章，パニュルジュの登場であるが，誰何する巨人に自らの空腹を訴えるにあたって，彼は三つの架空言語を含む計一三カ国語で答え，意志の疎通をあらん限り先送りにして章の主役を勤めるという点で，先のリモージュ学生とはネガとポジの関係が成立する。気の効かない学生が早々に退場したのに対し，お調子者のパニュルジュのほうは「とてつもなく」巨人の気に入られ，戦争勃発により巨人の存在が前面に押し出されるまで，ずるずると作品の中心に居すわることになる。トルコ人に串焼きにされかけた経緯を語り（十四章），石ならぬ女性器を素材とするパリ城壁の改造計画をぶち上げ（十五章），日々のいたずらに精進し（一六，十七章），ジェスチャーによる論争で高慢ちきなイギリス人学者を打ち負かし（一八，一九，二〇章），自分を振った奥方に派手な仕返しをして（二一，二二章）見せる。祖国で戦争勃発との知らせを受けた巨人と旅立った後も，フランスの一里が他国のそれより短い理由を得々と述べたり（二三章），巨人の恋人から届いた暗号手紙の解読に精を出したり（二四章）と，騒々しい活躍は続く。

パニュルジュ篇とも呼ぶべき作品のこの部分で，唯一異質なのは第十章から第十三章，初版における第九章 bis に相当する。しかるべき学識を身につけたパンタグリュエルが，二人の貴族の間に起こった訴訟を見事解決するというエピソードに，パニュルジュの影はまったく射さない。「父の手紙，励ましが身にしみた」というくだりから始まる第十章は，問題の手紙（第八章）の直後に置かれて何の違和感もないだけに，第九章におけるパニュルジュの出現は唐突の感を免れない。さらなる不思議は，登場人物の容貌に言及すること稀なラブレーが，パニュルジュを唯一の例外として，二回にわたって描写を試みていることである。まずは第九章，パリ郊外をそぞろ歩きする主人公の前に現れたパニュルジュは「スタイル身のこ

なしバッチリで，ボディラインもエレガント，だが哀れを誘う傷だらけ，着ている服もぼろぼろ」だが，パンタグリュエルは根拠もなく「シケた様子は仮の姿」と断じ，「あの人相は，本来はリッチでノーブルな家系の出，でも根が好奇心旺盛で，冒険の場数を踏んで，あんな金欠のスカンピンになっちゃった」旨代弁する。そして「冒険」のひとつであるトルコ脱出と，「好奇心」丸出しの城壁建設案が彼のキャラクターを読者に得心させた後に，わざわざ「パニュルジュの素行と人柄について」論じる十六章が控えているのである。悪漢小説の匂いが，冒頭のパラグラフから漂ってくる。

〈パニュルジュは並の背格好，チビでなくデカくなく，鼻は鷲鼻気味でカミソリの柄のかたち，当時は三十と五歳かその見当，金ぴかのメッキが剝げるまでもないナマクラ刀，なかなかスタイリッシュ，ただし少々スケベ，生来の持病というのが，その頃の呼び方で「金欠・貧血・カラッケツ」症候群，それでもこの男，イザとなれば金をめっけてくるのだが，その方策が六十と三つ，中で最もマットウかつ最も陳腐なやり方がこっそりコソ泥ってんだから，悪漢，ペテン師，ヨッパライ，街がわが家の，パリじゃ名うてのカッパライ，それでも最高にイカす奴，いつでも警官や夜警相手に何やら企んでいた。〉

あまりお近づきにはなりなくないが，距離を取って眺めれば「イカす奴」。悪徳と魅力の混在するアンビヴァレントな人物像は，先行する二章ですでに具体化されてはいるが，彼が作品の成立に不可欠な人材と，作者が改めて認知した瞬間が，この十六章冒頭かもしれない。巨人パンタグリュエルはその揺籃期，乳母代わりの牝牛の脚をつかんで腹に食いついたり，悪戯をしかけてきた熊をずたずたにして，これまたペロリと平らげたりと，特権的な身体を縦横無尽に用いて，朗らかな暴力でテクスト空間を満たしていた。その後も巨人性への言及はたびたび見られるものの，第八章の父の手紙により「知の深淵」たることを運命付けられてしまうと，主

人公に残された道はただひとつ，人文主義の理想を体現する賢人王めざしての精進である。つまずくことを許されないヒーローが光とすれば，これに影が添わねば，作品はひとつの現実として形を成すに至らない。

第八章で「光あれ」と叫んだ作者がエラスムスならば，第九章以下は純然たる教育論と化したかもしれない。ラブレーは「光あれ」の直後に「影あれ」と命じてパニュルジュを招じ入れた[3]。主人公の右腕となって活躍する風来坊には明らかなモデルが存在するにせよ[4]，主人公を差し置いての傍若無人の振る舞いに十章近くが割かれているのはラブレーの独創である。これは推測の域を出ないが，筆が進むにつれ陰影を増していく人物に作者自ら圧倒され，パニュルジュにより強烈なデビューを飾らせようと，第八章から第十章への自然な繋がりを断ち切って登場場面を書き加えたとすれば，ラブレーの物語性に対する天性の勘を証明することになるだろう。また第七章の滑稽図書館と第八章の父の手紙を，学問のあり方を巡るネガとポジと見れば，前後する第六章のリモージュ学生と第九章のパニュルジュが同じ言語遊戯を演じることで，作品のこの部分がシンメトリーを成す。

シンメトリーは部分に止まらない。「パンタグリュエル」が他の多くのルネサンス作品同様，直線的な叙述によらず「同心円的包摂」（A. B. C. D. E. D' C' B' A'）で構成されていることは既に指摘されているが[5]，中心たるべきEの位置に関しては意見が分かれる。

ギー・ドゥメルソンは，第十五章で言葉の城壁を築いたパニュルジュが，「愉快な奴」として，初めてパンタグリュエルの家来に迎えられる点に注目する。作品の中心に一見無意味なエピソードを配置することで，「愉快な」言説が市民的ユマニズムを奉じる巨人の王国で重要な役割を果たしていると，読者は気づくのである。

フランソワ・リゴロによれば，第十七章こそ文字通りの中心である[6]。1542年の決定版では，プロローグおよび前半の十六の章と，後半十六章および結語の二つのグループに，この章は挟まれている。ダンテの「神曲」もまた，作品の中心に位置する「煉獄篇」の，ちょうど真ん中が第十七歌

にあたる。「パンタグリュエル」ではプロローグ以来影を潜めていたナレーターが，第十七章で突然復帰してパニュルジュにインタビューを試みるという趣向は，「煉獄篇」のダンテ（ナレーター）とウェルギリウスの関係に酷似しており，偶然の一致以上の関係を想定することが可能である。

ところで第十七章は，第十六章と共に初版の第十二章を形成していた。初版では，パニュルジュの多様な悪戯が際限のない羅列の様相を呈し，読者が目眩を覚えるあたりで頃合いもよく「私」が出現し，三人称から対話への変換がテクストを単調さから救っている。1534年のフランソワ・ジュスト版以降，「私」以下が切り離されて第十七章となるのだが，この作業で第十七章が近代的な意味での独立したエピソードたり得た一方で，第十六章はメリハリを失い，等価の悪戯を数珠つなぎにした念仏と化した。「ある時は…またある時は…」，「然而…然而…」と列挙していくやり方は，同一の接頭語を繰り返しながら不可思議な例の列挙に終始する驚異譚や通俗博物誌[7]への先祖返りとも見える。敢えて訳出したのは，小説を体験した目には単調と映じかねない足踏み状態にこそ，部分を全体に通底させる秘密が隠されており，活き活きした語り口により卓越した細部たり得ている第十五章や第十七章よりは「へそ」の可能性が高いのではないか，との下心による。論より証拠は，以下のとおり。

〈ある時は，結構なゴロツキを三，四人集め，宵にウワバミのようにたらふく飲ませ，それからサント・ジュヌヴィエーブ山手教会の下手やナヴァール学寮の側に連れていき，夜警が登ってくるころになると，パニュルジュは舗道に剣を立て耳を寄せて気配を察知，剣が反響でふるえれば，連中が近くに来た確かなしるし，さてそこで，仲間と砂利運びの車を持ち出し，えいとばかりに揺さぶりをかけ，これを坂下めがけて力の限りに押し出した，と，哀れ夜警の連中は，全員がトンころりと地べたに転がっちまう，そこでパニュルジュたちはあらぬ方へ雲隠れ，というのも来て早々に，彼はパリの道という道，路地，抜け道を，「ごちそうさま」のお祈り並に熟知していたのである。

またある時は，どこぞのおあつらえ向きの広場が，例の夜警の通り道とあって，そこに火薬の粉を筋に引いておき，彼らが通りかかると点火して，あとはゆっくりお楽しみ，連中が逃げだす際のてんやわんやを見物するのだが，彼らときたら，脚を聖アントワーヌ熱にやられたと思い込んで跳ねるのだ。

さても気の毒なのは文芸学部の教授連，パニュルジュは他の誰にもましてひどい目にあわせたものだが，道を先生方のひとりが通りかかろうものなら，悪戯せずにはおかなんだ，ある時は帽子の縁からウンコを入れ，またある時はキツネのちっちゃな尾っぽやウサギの耳を背中にくっつけたり，何やかや，しでかすのだった。ある日，先生方に招集がかかり，フュール通りに集まったときのこと，パニュルジュはブルボン風タルトをこさえたのだが，材料は山盛りのニンニクと，ゲロゲロゴムと，メチャクサ樹脂と，スカンク・エキスと，ほかほかウンコ，コネコネしたのを性病潰瘍性膿瘍の血膿にひたして，朝まだきに舗道の隅から隅までこれをぬたくり，なすくりしたものだから，悪魔でさえ鼻をつまむというありさま。そこで教授のお歴々は衆人監視の中で鯨の潮吹きならぬゲロを吐き，そのうち十人か十二人はペストで死亡，十四人はライ病になり，十八人は痛風で，二十と七人以上が梅毒にかかったが，パニュルジュの知ったこっちゃなかった。

彼はつねづね笞を服の下にたずさえており，主人に酒を届ける途中のお小姓と見ると容赦なく打ちすえ，いっそう道を急がせるのだった。

彼はショートコートに二十と六以上ものポケットやミニポケットをつけていて，これがいつでも満杯，そのうちのひとつには小さな鉛のサイコロと，小刀が一本，皮革職人の錐みたいに尖らせてあり，巾着を切るのに用いた。別のポケットには酢を入れて，通りがかりの人に目くらましをかけた。別のポケットにはヤエムグラのイガイガ玉，これにガチョウのひなやキンヌキ鶏のちっちゃな羽根をつけて，ハイソな連中の帽子や服をねらって投げつけた。えてしてこの玉が帽子の立派な角となり，角生え寝取られ亭主のかっこうで街中歩くどころか，一生そのままのこともあった。

女性にも後ろから頭巾めがけて投げ，玉の連なりをポコチンのかたちに仕上げることもあった。

別のポケットにはラッパ形の小袋がいっぱい，中身はノミやシラミがうじゃうじゃ，聖イノサン墓地のホームレスから拝借したもので，虫をピッと飛ばすにはステキな細身の葦や羽根ペンを用い，その場でいちばん可愛い子ブリッコの襟元に，主に教会でねらいをつけた。というのもミサや夕べのお祈りによらずお説教によらず，彼は教会奥の男性席には決して座らず，いつでも入口近くの女性たちの間を定席にしていたのである。

別のポケットは釣り針や鉤でぱんぱん，同席の男と女がひっついていると，よくこれで二人をつなぎ合わせたものだが，とりわけ薄いタフタ地のドレスを着ている女が狙い目で，その場を去ろうというときに，服がずたずたになるのだった。

別のポケットには点火セット一式，火口，焚き付け，火打ち石，その他必要な道具が揃っていた。

別のポケットには凹面鏡が二つ三つ，時にはこれの反射で男といわず女といわずアチチのチと騒がせて，教会で面目丸潰れにしたものだ。彼の言うことに，「教会のいんちき乱闘女」と「業界のらんちき淫蕩女」とは，たった一字違いなのであった。

別のポケットには針と糸のストックがどっさり，これでこまごました悪さをゴマンとやってのけた。

いつだったか，高等法院出口の大ホールで，フランシスコ会修道士が司法官の先生方相手にミサをあげたときに，パニュルジュは着替え，身支度のお手伝いをしたのだが，司祭に着せかけながら，上っぱりの祭服を法衣と下着に縫いつけておき，やがて先生方が到来しミサを受けるべく着席したところで身を隠した。ところが「ミサ終了，解散」のところまで来て，哀れ坊さんが祭服を脱ごうというときに，法衣と下着も一緒にたくし上がったのは，ぜんぶしっかり縫い合わせてあったからだが，こうして肩のあたりまでめくれたために，彼の珍宝を衆目にさらしたが，モノは小さいとはいいかねた。さても坊さん，ますます引っ張って，よけいに肌をさらす

こととなり，ついには司法官の一人が言うことに，「まったく，こちらの尊師は私どもに寄進させておいて，自分のお尻にキスしろとでも？　熱病のバイキンにでもキスしてもらうがいいや」。

この一件以来，おかわいそうな神父様方に命が下り，もはや人前で服を脱ぐな，着替えは控えの間でしろ，ことにご婦人方の前はダメ，彼女らが罪な気持ちを起こすきっかけになるから，というのだった。

その折，世人は尋ねたものだ。「なぜ坊さんたちのタマキンはぶらりと長いんでしょうか？」。例のパニュルジュは問題を快刀乱麻，こう言った。「なぜにラバの耳がかくもデカいかといえば，それは母ラバが決してチビの頭に紐付きキャップをかぶせなかったからだと，デ・アリアコ先生も『代示論集』で説かれておりやす。同様の理由で，おそれ多い神父様方のタマキンがああなのは，あの方たちがまったくパンツをおはきにならないからで，困りモノは気侭にびろんと伸び放題，膝の上まで来てぶーらぶら，ちょうど女の人が腰につけるロザリオみたいに揺れるわけ。でもなんで長さ相応に太いかというと，それはですね，ぶらぶらの揺れで体液が例のモノまで下りてくるんですな。なぜなら法学者によると，恒常的な振動および動揺は延引の原因でありますからして」。

然而，彼は別のポケットいっぱいにクスグリハンノキを入れておき，中でもお高くとまった女と見ると，背中に投げこんで，たまらず人前で服を脱ぐ者あり，あるいは跳んだり跳ねたりで，炭火の上でアチチの鶏か太鼓を連打するバチみたいになった。また往来を駆けだす者もあって，すると彼は後を追い，相手が服でも脱ぎだそうものなら，背中に自分のマントをかけてやり，ご親切なジェントルマンを気取るのだった。

然而，別のポケットには廃油がつまった小瓶を入れておき，めかしこんだ男や女がいると，いちばん目につく箇所ぜんぶに油をかけてダメにするのだが，服を触るふりして，こう言うのだ。「こりゃ結構な生地ざんすね，いいサテン，いいタフタですこと。奥さま，ノーブルなお心のお望みのままになりますよう。おや色男，一着新調しましたね。どうぞご機嫌うるわしゅう」。話しながら襟元に手を置く，同時にしつこい染みがバッチリつ

いてしまい，身も心もずたずた評判がた落ち，悪魔も消せない汚点となったが，あげくの捨てぜりふが，「奥さん，落っこちないよう，気をつけて。お体の前のほうにデカくてババちい穴が開いてますぜ」。

また別のポケットは顆粒状にしたクシャミン樹脂でふくらんでおり，そこに凝ったつくりのステキなハンカチを入れていたが，これは法院近くのリネンショップのべっぴんさんの胸元からシラミ取りつつくすねた品，そもそもシラミは彼が仕込んでおいたものであった。そして良家のご婦人方と一緒の折など，彼はランジェリー小物に話を持っていき，相手の胸元に手を添えて尋ねるのだ，「この細工はフランドル製，それともエノー製？」。それからハンカチ引っ張りだして，「ほうら，これもなかなかの品でしょう。セックスフォードかファッキンガムの製品ですよ」なんちゃって，連中の鼻先でパタパタはたくものだから，みなさん四時間ぶっ続けでクシャミすることになった。彼はその尻馬に乗って軍馬さながら屁をこいたので，女たちが笑って言うことに，「いやーんパニュルジュさんたら，オナラ？」。

「違いますともさ」と彼，「奥さんがお鼻で鳴らしてるメロディーの伴奏をしてるんですよ」

また別のポケットには，ペンチにペリカンやっとこ，鉤，その他の道具類，これでこじ開けられないドアも金庫もないときたもんだ。

別のポケットは小さなカップでいっぱい，彼はこれで実に巧みに曲芸をした，というのも彼の指はハンドメードの特注品，器用なことは左甚五郎かミネルヴァか。かつては大道で芸してガマの脂を売っていたこともある。

で，彼がテストン銀貨や何か他の硬貨を両替する段になると，両替商が鼠小僧も真っ青の曲者でもない限り，パニュルジュは毎回小銭をば数枚ちょろまかすに事欠いて，公衆の面前で堂々と，これ見よがしの早業に，傷もケチもつくもんじゃなく，両替商のほうは一陣の風に目をぱちくりするばかりだった。〉

最後まで付き合わされた読者も，まさに「目をぱちくり」。出だしも盛り上がりも結末もなく，末尾を冒頭につなぎ合わせれば永劫回帰の自動装置が出来上がる。パニュルジュのポケットはドラえもんのそれと同じく無限を内に秘めて，奇怪な虫や植物や道具を万国旗のように吐き出し続け，彼の指さばきは光速を超え視線を免れることで，却って不動の印象を与える。同時偏在するパニュルジュは，一人にして全員のエブリマンであり，高価なドレスと見ればずたずたに裂き，権力側の人間をスカトロ・下ネタでなぎ倒していく無差別攻撃の鮮やかさは，破壊の向こうに再生を，闇の彼方に光を感じさせて，後味に厭味はない。「パンタグリュエル」全体の光源が主人公の巨人とすれば，ここ十六章において，影としてのパニュルジュは名前通りの万能ぶりを発揮し（*πανοΐυργος*＝狡い，巧み，何でもござれ），彼の凹面鏡には物語のみならず世界の全体が縮図として納まっている。この悪夢と笑いのミクロコスモスを「へそ」と見れば，作品の丈がいっそう伸びて見えるのは気のせいか，それともラブレー先生一流の手品だろうか。

注

（1） 翻訳はプレイヤード版を定本としつつ，ラブレー協会版を始めとする各種の版を参照した。François Rabelais, *Œuvres complètes*, éd. par Mireille Huchon et François Moreau, Paris, Gallimard,1994.

（2） 第八章から第十三章までのどの部分が他に先行するかについては諸説ある（cf.E.M.Duval, *The Design of Rabelais's Pantagruel*, New Haven/London, Yale University Press, 1991, p.164, note 5）が，当論は Gérard Defaux 説（Le Livre de Poche 版解説）による。

（3） 詭弁と征服欲に満ちたパニュルジュを，ソフィストと断じて否定的に論じたのは G. Defaux である（*Pantagruel et les Sophistes*, La Haye, Nijhoff, 1973）。
前出の E. M.Duval は作品を叙事詩とバイブルのコンテクストに置き，パンタグリュエル＝アエネアスに対するパニュルジュ＝アカテスと見立てた上で，欠陥人間パニュルジュを抱擁するパンタグリュエルの慈愛にキリスト的ヒーローを見ている。Françoise Charpentier はパニュルジュを巨人の矛盾した分身に見立て，「卑猥」をキーワードに十五章

を論じつつ九章まで言及している（“Le lion, la vieille et le renard, Rabelais et l'obscène”, in *Europe*, mai 1992,pp.80-91）.。

（4） メルリヌス・コッカイウス（テオフィロ・フォレンゴ）の諷刺的叙事詩『バルドゥス』（別名『奇天烈物語』，1517年刊）では力持ちフラカッススと韋駄天ファルチェットと共に，抜け目のないチンガールが主人公バルドゥスの手下として活躍する。作中のチンガールの肖像は，第十六章の縮図の観がある。

cf. *Histoire maccaronique de Merlin Coccaie*, éd. par P. L. Jacob, Paris, Garnier Frères, 1876, pp.53-54.

（5） Guy Demerson, *Rabelais*, Paris, Fayard, 1991, pp.22-26.

ちなみに『第三之書』のシンメトリックな構成についてはE.M.Duvalの論証がある（“Panurge, Perplexity, and the Ironic Design of Rabelais's *Tiers Livre*”, in *Renaissance Quarterly*, autumn 1982, pp. 381-400）。

（6） François Rigolot, “La « conjointure » du « Pantagruel » : Rabelais et la tradition médiévale”, in *Littérature*, 1981,fév.,pp.93-103.

（7） 一例を挙げる。十六世紀初頭の作者不詳の小冊子『これぞ博物学の神秘なり』では草木の驚嘆すべき特性を論じるにあたって，「然而プリニウス曰く」，「然而デモクリタース曰く」と列挙が続く。

cf. *C'est le secret de l'hystoire naturelle*, Paris, Philippe Le Noir, s. d., in-4°, BN Rés.S.741.